

# 巻 頭 言

「看護研究雑誌の果たす役割」

The Role of OMC Journal Nursing Reserch

看護学部 教授 田中 克子

一期生の卒業生を出してはや半年がすぎました。一期生は各職場で新任看護職者として日々頑張っている毎日です。病棟で卒業生を垣間見るたびに、頼もしいとは思いつつ、やはり心配はつきものです。卒業生の成長を確認しつつ、学生の一挙手一投足に一喜一憂しています。一方で、本学看護学部の教育目標を達成できているのだろうか、ということも考えなければならない時期になりました。

看護系の大学教育機関は、大学化の流れの中で、それぞれの理念と特色を生かし、創造力、思考力を備えた看護職者の育成をめざし、大学と大学院の設置数も増加しています。その増加は現在も続いています。臨床の看護職には、医療技術の進化とともに次第に複雑になり、高度な医療機械の導入に伴う補助業務、観察とヘルスアセスメント、また入院期間の短縮化に伴い、短期間に対象者の状況を判断し、指導していく力も求められるようになってきました。また、現在は、時代の要請に対応するものとして、保健行動、病気に対する自己管理行動の促進への看護実践が期待されており、さらに、高齢患者、慢性疾患、併発疾患を多くもつ患者の増加など、医療の発展と共に生じる様々な倫理的課題の増加から複雑な問題への解決する能力も期待されています。つまり、看護職者には多様な知識と複雑かつ効果が実証されたスキルが必要になってきています。

以上のように看護系大学の増加とともに専門化が挙げられ「質の高い看護職の養成・確保」が提言され、大学、大学院の質が問われるようになってきました。ここで、日本看護系大学協議会の看護職の教育に関する声明を一部引用したいと思います。

「看護は、他の専門職と同様に人間社会の要請の中で芽生え、その時代の中で変化しつつ発展を続けてきた。専門職はつねにその社会の文化や諸制度に承認されつつ発展する。その意味において、看護職のもつ専門的知識・技術はその社会、その時代の資産といえる。

人類の生ける歳月、看護はいつも人々とともにあり、健康をまもり、その人らしい生活を築くことに貢献してきた。看護の社会的責務は、国民の期待と信頼を背に、日々の実践に必要なわざを磨き、かつまた人々の保健医療・福祉サービスの改善に立ち向かい、より健康な社会をつくるべく常に努力を積み重ねることである。看護学という学問の特性として、1. 看護は人間の歴史と共に存在している。2. 看護学は人間を全体として対象とする。3. 看護学の焦点は、人間の健康であり、その目的は人間の尊厳をまもることである。4. 看護学の探究方法は確立されようとしているところである。」と述べています。つまり、看護はそこに生きる人間を対象としており、時代とともに、社会とともに変化し柔軟に対応していくものであるということです。しかし、看護学は確立されようとしているところであるので、看護研究を発表し、その評価を多くの皆様から得ることは重要だと思います。

本学も卒業生を輩出し、研究科設置とともに看護研究の充実に向けて本学の看護学部としての果たす役割を明確にするうえでも看護研究雑誌が一助を担うことができれば幸いです。今後も多くの論文が投稿されることを期待しております。